真の合意形成へ

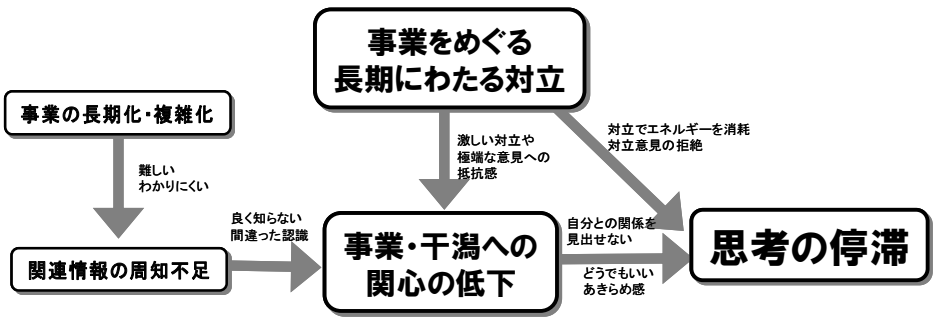
2007 年 7 月 28 日
東部海浜開発事業検討会議
市民委員　藁科 邦利

１．はじめに

2006 年 12 月、ふと目を通した広報をきっかけに、それから約 7 ヶ月の間非常に重要な会議に参加させていただきました。内地出身、しかも沖縄市に住んでようやく 2 年になろうという私が、東部海浜開発事業という沖縄市にとって非常に重要かつデリケートな問題に関わることは出すぎたことではないかという思いもありましたが、未来に生きる子供たちのために、きちんとこの事業を知らなければならない、また内地出身だからこそできることがないか、という気持ちから参加させていただきました。とても頼りない委員で振り返れば反省点は山のように出てきますが、それでもできることは精一杯やらせていただいたつもりです。検討会議を通し、いろんなことを感じ、考えてきましたが、その中でも特に言いたいことを、自分の言葉で言える範囲で少しだけ述べさせていただこうと思います。ここでの内容は、私が個人的に感じたことであり、会議としての意見でも市民を代表しての言葉でもありません。内地から沖縄市に移住して 2 年足らずの一市民が感じたちっぽけな意見ですが、沖縄市の未来が少しでも良い方向に向かってほしいという精一杯の願いを込めています。つたない文章で申し訳ありませんが、ご一読いただければ幸いです。

２．東部海浜開発事業における市民意識

この会議を通じて感じた、東部海浜開発事業における市民意識ついて図式化してみました。かなり限定的な内容ですので、全ての状態が集約されているとは思いませんが、一つの構図としてこのようなことが考えられるのではないかと個人的には分析します。



現在の東部海浜開発事業における市民意識の状態を一言で言えば、**『思考停止状態』**ではないかと感じています。当初沖縄市が単独で行う計画だった東部海浜開発事業は、現在埋立の事業主体は国と沖縄県になり、沖縄市は埋立地の利用を担当することになりました。この計画が策定されたのが平成 7 年。それから現在まで、土地利用の計画はほとんど変わっていません。12 年たった今、その計画を時代に即しているか、十分に魅力的か、東部地域の経済の起爆剤になりうるかというと、かなりの疑問があるのは会議で精査したとおり。

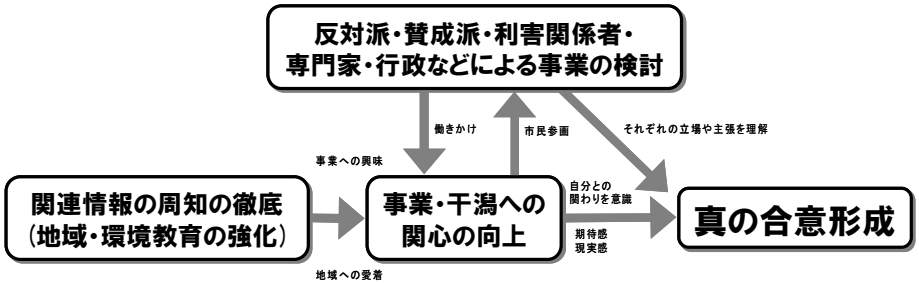
残念ながら、このままの計画では起爆剤となりえないと思っています。埋立の目的の一つは東部海浜開発事業実現のためであり、埋立地の面積や形状も東部海浜開発の計画に基づくものです。経済の起爆剤となりうる魅力あるまちを描けなければ、埋立の理由の根幹が揺らぐことにもなりかねません。しかしそこを指摘・議論されることはあまり無いように感じられます。**一部では関心を失い**、また**一部では推進・反対の議論に終始**し、前向きに未来を描くことができていない気がするのです。

会議を通じて感じたこととして、東部海浜開発事業や泡瀬干潟のことは自分には関係ないと思っている市民が多いように思いました。興味も関心も無く、良く知らない、期待もしていない。そういう市民は少なくないというのが、会議を通しての私の実感です。これだけ大きな事業であるにもかかわらず、一部では非常に注目されているにもかかわらず、その中心にいる沖縄市民があまりに無関心ではないかと思えてなりません。待っているだけ、受け入れるだけでは、決してこのまちは良くなっては行かないはず。市民一人一人がもっとこの事業に、そして沖縄市の将来に関心を持たなければ、良い未来がやってくるはずはありません。

また無関心の市民がいる一方で、推進派と反対派の間では激しい対立が続いています。誰よりも沖縄市や泡瀬干潟のことを考えている方々が対立する、非常に辛い状況です。それぞれの団体の方に話をうかがいましたが、どちらの主張も納得できるもので、どちらかが間違っているというものではありません。立場や視点が違うだけで、切実な思いがありました。干潟の現状悪化を憂い、沖縄市の発展を願う気持ちはどちらも同じように感じました。だからこそ、対立に終始するのは沖縄市の発展のためには大きな損失だと感じずにはいられません。そして残念ながら、この対立も多くの市民にとっては興味の低下に拍車をかける要因となってしまっているように感じます。

３．これからの沖縄市のために

沖縄市の未来をより良くしていくためには、もっと多くの市民が考え、話し合い、将来について検討していくことが必要だと考えます。賛成・反対だけではなく、誰もが納得できる未来を検討していかなければなりません。そして一部の人たちの議論に終始するのではなく、市民の総意としての合意形成を再度目指す必要があります。過去の合意形成を否定するわけではなく、現在の状況にあわせた問題解決という意味で**『真の合意形成』**を目指してほしいと願います。そのために、**①さまざまな人を巻き込んでの事業の再検討**と、事業や泡瀬干潟のこと、周辺地域のことも含めた**②関連情報の周知の徹底**が必要だと考えています。



東部海浜開発事業については、過去にさまざまな検討がなされたと聞いています。当初は地続きだった埋立地は、地元泡瀬の方々の反対・提案により人工島へと姿を変え、規模も大幅に縮小されています。この合意形成へのプロセスはすばらしいことだと思います。このようなすばらしい合意形成を成し遂げた事業だからこそ、現在持ち上がっている問題の解決も不可能ではないと考えます。当時と現在とでは埋立ての事業主体が変わり、事業が非常に複雑になっていますし、干潟や環境への認識もずいぶん変わりつつあります。それでも沖縄市として、合意形成への挑戦をあきらめてほしくはありません。推進派・反対派のどちらも、沖縄市の現状や干潟の環境悪化を憂い、沖縄市の現状をどうにかしたいと考えているのは共通の願いだと思います。同じ願いを持っているなら、少しでも共有できる願いがあるなら、きっとみんなが『満足』とまではいかなくても『納得』できる道はあるのではないかと信じたいのです。対立が強いからこそ、そのエネルギーを共に沖縄市の未来や次の世代のために投じることができたら、これほどすごいことはないと思うのです。そのためにも、推進派・反対派・利害関係者・各専門家・行政を交えた話し合いを積極的に行うべきだと思っています。東部海浜開発事業の本来の目的は東部地域の活性化のはず。土地利用という枠を超えて、東部地域の活性化、国際海洋性リゾート拠点の実現のために話し合うことが必要です。いまからでも決して遅くはないと思います。きっとなにか解決策が見つかるはずと信じています。

それとあわせて、沖縄市には事業に関連する情報を整理し、市民全体に知ってもらう努力が必要だと思っています。もちろんいまでも情報は公開されていますが、単に情報を公開するだけでは、興味のある人には有用でも、興味の無い人にとっては全く意味の無いものでしかありません。公開の一歩先、周知の徹底をしなければ、この事業に対する市民の関心は得られないと思います。沖縄市でも、この事業に関してさまざまな周知活動が行われていることは知っています。大変な労力だとお察しします。しかしまだ十分効果が出ているとは感じられません。もっともっと市民に知ってもらわなければなりません。従来の広報誌やホームページ、説明会などで足りないのであれば、もっと違う方法も検討してください。この事業を、沖縄市の問題を、市民一人一人が自分たちの問題として考えられるほどの周知を目標に。

泡瀬干潟に関しても、間違った知識や認識がまだまだ根強いように感じます。泡瀬干潟に流れ込む生活排水やゴミ捨てなどの問題は、この地域の価値や干潟の価値についての関心が無いことが根本の原因ではないでしょうか。沖縄市の持つわずかな海岸線は、世界に誇るものであることを市民一人一人に知ってもらいたいと願っています。そしてこのすばらしい市の財産を大切にしていける沖縄市民であってほしいと願っています。地域を知り、歴史を知り、自然環境を知れば、もっとこの地域が好きになるはず。この干潟が好きになるはず。その気持ちが沖縄市の未来を支える原動力になるはずだと思っています。

４．おわりに

東部海浜開発事業の精査の内容については検討会議の報告に記されるはずなので、このレポートでは私個人が会議を通じて強く感じたことを中心に述べさせていただきました。考

えの至らない部分、考察が甘い部分など数多くあるかと思いますが、一個人の願いとしてご理解ください。

市民がそれぞれ勝手な方向を向いていては、この事業や沖縄市が抱える問題の解決に辿り着けるはずはありません。より良い未来はやってきません。対立だけでそこには答えがない気がしてなりません。だからこそ、市民全員が同じ方向を向いて問題に取り組む必要があるのではないでしょうか。行政も含め、市民が力をあわせることできっとなにか良い方向が見えてくると信じています。

この検討会議が、そしてこのレポートが、沖縄市の未来と未来を担う子供たちのために、少しでもお役に立てれば幸いです。